

実体経済の動向

◇生産、出荷とも依然横ばい基調

9月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、前月比+4.0%とかなり上昇した。これは、電力向け大型機械の完工集中、化学機械、印刷機械の著増を主因に一般機械の生産が前月比+19.7%と著増したことが大きく影響したためである。3ヵ月移動平均で最近の動きをならしてみると、7月+0.2%、8月+0.5%、9月-0.2%(10月は速報値による)となお横ばい基調を脱していない。生産がこのような推移を示しているのは、最終需要の低調、メーカー製品在庫の高水準を映じて、メーカーが生産抑制態度を持続しているためである。とくに、市況商品業種の多い生産財は7月以降減少を続け、当月は鉄鋼業のほか繊維工業も徐々に減産となった。

特殊分類別に生産の動向をみると、生産財、建設資材は減少したが、資本財は著増、消費財も増加した。まず資本財では、輸出向けを含めて電力向け大型機械、化学機械、運搬機械、印刷機械などが著増したため一般資本財が大幅増産(+21.1%)となり、輸送機械も乗用車、トラック、バスを中心に著増した。また、消費財関係では、耐久消費財が軽自動車、家庭用電器を中心に、非耐久消

費財が医薬品、たばこなど雑品を中心にそれぞれ増加した。一方、建設資材はセメント、板ガラスを中心に引き続き減少し、生産財も鉄鋼製品、機械工具などの減産を中心に微減した。

なお、10月の生産(速報、季節変動調整済み)は、前月比-2.0%と減少した。これには、9月に著増をみた電力向け大型機械が当月反動落ちとなったことが大きく響いており、生産の基調は依然横ばいに推移している(電力向け大型機械を除いて試算してみると生産は前月比全くの横ばい)。

一方、9月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は、前月比+2.6%と増加したが、これは電力、輸出向け大型機械の著増を主因に一般機械工業が前月比+19.3%と著増したのが響いたもので、鉄鋼、繊維は引き続き減少している。総じて、前月落込みの反動や期末月の関係による増加が主因であり、最近の動きを3ヵ月移動平均でならしてみると、7月が前月比-0.2%、8月同+0.2%、9月同+0.8%(10月は速報値による)と、基調的には依然横ばいを続けているものとみられる。9月の動きを特殊分類別にみると、建設資材を除き各財とも増加しており、とくに一般資本財が生産同様電力向け大型機械、化学機械、精密機械の輸出増を中心に前月比+19.2%と著増したのが目立つ。輸送機械の出荷は、鉄道車両、自動二輪車が減少の反面、乗用車、トラックが増加して、全体では小幅の増加となった。消費財関係では、耐久消費財が生産同様軽自動車、家庭用電器(テレビジョン、電気洗濯機、電気掃除機)、毛糸手編機械などを中心に、非耐久消費財も医薬品、革製品などを中心に、それぞれ増加した。また、生産財も鉄鋼、化学(主としてソーダ工業薬品・タール製品)が減少した反面、石油製品、非鉄製品が増加して全体では微増した。一方、建設資材のみはセメント、耐火レンガを中心に減少した。

なお、10月の出荷(速報、季節変動調整済み)は前月比+0.8%と、9月に引き続き増加した。生産と同様、電力向け大型機械が前月著増の反動で大幅減少を示したものの、輸送機械(鋼船)、非鉄

特殊分類別生産動向

(季節変動調整済み、前期(月)比増減率%)

	39年	40年			40年		
	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
投資財	4.1	0	-2.5	-0.3	1.6	-5.6	10.0
資本財	5.9	-0.4	-2.3	0.3	-1.7	-7.0	14.1
同(輸送機械を除く)	4.1	-1.4	-5.1	1.8	2.0	-10.5	21.1
輸送機械	23.3	1.0	-1.7	1.3	-4.5	-2.4	10.0
建設資材	-1.1	0.4	-1.7	-1.4	-0.3	-1.2	-1.8
消費財	1.2	-0.7	-2.9	2.0	1.4	-0.2	2.9
耐久消費財	-1.9	-2.8	-8.6	1.4	3.3	-1.9	3.5
非耐久消費財	2.4	0.5	0.5	2.1	0.4	0.1	3.2
生産財	1.9	1.1	0.4	-1.3	-0.7	-1.4	-0.2

(注) 通産省調べ(35年=100)。

金属、窯業などが増加したためである。

9月のメーカー製品在庫(季節変動調整済み)は、輸送機械の著増を主因に、前月比+0.8%と引き続き微増した。出荷がかなり増加し、在庫は微増にとどまったので在庫率は前月比-1.8%下落した。

製品在庫の動きを特殊分類別にみると、投資財のうち、輸送機械が新車発売を控えた乗用車の備蓄生産を中心として著増(+22.6%)したことが全体の在庫水準上昇に大きく響いており、一般資本財では鉄鋼(鋼管、鋼索)、電機(汎用モーター、標準変圧器)、農業機械などを中心に減少した。また、建設資材もセメント、亜鉛鉄板を中心に減少した。一方、消費財は、テレビジョン、ラジオなど家庭電器を中心に耐久消費財が減少したものの、非耐久消費財が繊維製品のほか洗剤、たばこなど雑品目を中心に増加して全体では微増した。また、生産財も、圧延鋼材など鉄鋼製品がほぼ軒並み減少したが、繊維(綿糸、スフ糸)、石油(灯油、軽油)、化学品(化学肥料、ソーダ工業薬品)などが増加したため、全体では微増した。

10月のメーカー製品在庫(速報、季節変動調整済み)は、前月比-0.6%と7ヵ月ぶりに減少した。非耐久消費財が若干の増加となったほかは各財とも軒並み減少し、在庫率も前月比-1.4%と

前月に引き続き低下した。

9月のメーカー原材料在庫(季節変動調整済み)は、前月比-0.6%と微減した。国産素原材料は前月比微増したが、輸入分素原材料は原綿、原毛の減少を主因に久方ぶりに微減を示した。一方、国産製品原材料は、機械メーカー鋼材在庫、織物メーカー原糸在庫は増加したが、鋼船用鋼材在庫、化繊用化学製品在庫などの減少から、全体では微減した。最近におけるメーカーの原材料在庫率指数の推移をみると、5、6月を底として回復に転じ、8月の水準はほぼ本年2月並みに復している。このような指標からみる限り、原材料在庫調整の動きはすでにほぼ一巡しているものと思われる。

なお、8月の販売業者在庫(季節変動調整済み)は、前月比+1.2%と増加した。製品在庫は鋼材、織物などの減少にもかかわらず自動車的大幅在庫増が響いて微増し、素原材料は綿花など繊維原料の在庫積み増しを中心にかなりの増加を示した。

最後に設備投資関連指標の動きをみると、まず9月の一般資本財出荷(季節変動調整済み)は前月比+19.2%と著増したが、これは前述のように輸出向けのタービン、発電機、化学機械、精密機械が著増したこと、期末月のため一部機械メーカー

生産・需給動向(鉱工業)

(季節変動調整済み、増減率は%)

	39年	40年	40年		40年		
	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
生 指 数	172.8	172.8	171.6	173.5	174.1	169.8	176.6
前期(月)比	2.2	0	-0.7	1.1	0	-2.5	4.0
産 前年同 比	12.4	7.7	4.2	2.5	3.0	2.1	1.9
出 指 数	166.0	168.6	168.3	168.4	168.0	166.4	170.8
前期(月)比	2.2	1.2	-0.2	0	-0.9	-1.0	2.6
荷 前年同 比	10.5	7.9	4.8	3.3	3.0	4.3	2.5
製 指 数	215.4	217.9	220.8	223.9	221.2	222.2	223.9
前期(月)比	8.0	1.2	1.3	1.4	0.2	0.5	0.8
品 前年同 比	20.8	18.3	15.0	12.3	14.5	13.3	12.3
在 庫 在 庫率 指数	128.1	128.7	130.2	131.1	131.0	133.6	131.1

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は(期)月末在庫。前年同期(月)比は原指数による。

需要関係の指標

	40年			40年		
	3月	6月	9月	7月	8月	9月
素 原 材 料 在 庫	107.1	119.0	114.3	113.1	114.6	114.3
(在 庫 率)	(71.4)	(68.4)	(74.0)	(73.4)	(74.9)	(74.0)
う ち 輸 入 分	109.6	115.6	119.6	117.4	120.3	119.6
(在 庫 率)	(68.5)	(65.7)	(70.5)	(69.7)	(71.7)	(70.5)
製 品 原 材 料 在 庫	138.8	138.6	137.4	140.0	138.7	137.4
(在 庫 率)	(84.6)	(81.9)	(83.8)	(84.7)	(85.4)	(83.8)
販 売 業 者 在 庫	186.0	190.5		189.2	191.5	
	40年	4~6月	7~9月	40年		
	1~3月平均	月平均	月平均	7月	8月	9月
機 械 受 注 (海運を除く)	645	551	623	539	515	817
(同季節調整済み)	(619)	(573)	(575)	(580)	(556)	(588)
機 械 販 売 (船船を除く)	1,199	996	1,220	1,045	1,081	1,533
(同季節調整済み)	(1,152)	(1,063)	(1,096)	(1,397)	(1,114)	(1,078)
資 本 財 出 荷 (輸送機械を除く)	181.3	173.0	172.7	172.8	157.6	187.8

(注) 在庫・出荷は通産省調べ、季節変動調整済み指数(35年=100)。機械受注、販売は企庫庁調べ127社分。

で出荷繰り上げが行なわれたことなどのためであり、基調的な好転を示すものとはみられない。もっとも先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)をみると、9月には前月比+5.6%の増加となり、7~9月平均でも+0.2%と久々に下げ止まりを示した(1~3月-3.3%、4~6月-7.3%)。9月の増加は、非製造業からの受注が電力、サービス業関係を中心に前月比+0.2%と微増したほか、製造業関係でも石油精製プラント、製鉄機械の受注増を主因に前月比+6.4%と2ヵ月連続して増加したためである。製造業からの7~9月平均受注額は前期比-2.2%となお減少してはいるが、1~3月期(-14.7%)、4~6月期(-14.5%)に比べれば下げ幅がかなり縮小している。

◇多くの商品の市況は回復歩調、鉄鋼、綿糸などは再び軟化

10月から11月前半にかけての商品市況をみると、非鉄とくに銅の一段高が目立ったほか、石油、セメント、紙なども引き続き回復歩調をたどった。また繊維のうち生糸、そ毛糸なども比較的堅調に推移し、化学のうち基礎薬品類もひとところの軟弱地合いを次第に脱却しつつある。反面鉄鋼、綿糸、スフ糸は月末、月初にかけ一時下げ止まりないし小反発を示したものの、その後再び軟化した。また砂糖も弱含みとなり、合成樹脂は終始じり安歩調を続けた。

商品別にやや細かにみると、まず鉄鋼は、薄板、厚板条鋼類を中心に10月末近くまで訂正安を続けたあと、月末から11月初めにかけ値頃感の台頭、大口需要業界との価格交渉妥結(薄板)などをはやし下げ止まり気配となった。しかし、実需が引き続き不振なうえ、輸出成約の減退に対処するため考慮された10~11月期粗鋼減産の強化に関する話し合いが業界の足並みの乱れから進展せず、需給の改善が足踏みする懸念が出てきたことから、月央にはいり再び軟弱商状となった。繊維では、そ毛糸、生糸、人絹糸などが需給の改善、原料高などを背景に、漸次底堅さを増したものの、

大宗を占める綿糸、スフ糸は操短実施にもかかわらず、生産量があまり減少せず、かたがた機屋筋の購入態度も依然低調の域を出ていないこともあって、もみ合いのうちに訂正安傾向を続けた。また織物類も末端実需の停滞などを映じ弱含みとなった。一方、非鉄では、さすが軟弱地合いを改めなかったものの、銅、鉛は海外相場の高騰と輸出伸長による市中荷余り感の解消から一段と上伸し、亜鉛も輸出の好調にささえられて底入れ気配となった。

また石油では、ガソリン、灯油がメーカーの生産・出荷調整継続、需要期入りなどを背景に引き続き堅調となったほか、重油もセメント業界向け価格引上げ交渉の妥結を契機に先高感の台頭をみたが、軽油だけは前月に続き弱含みであった。セメントはメーカーの協調体制をささえとした売り腰強化と道路関係などを中心とした官公需の増加を映じじり高となった。また紙も、実需はなお総じて低調ながら、生産調整の進展を映じて洋紙、板紙とも徐々ながら改善を続けた。化学では、合成樹脂が需給の引きゆるみからじり安傾向をたどったものの、基礎薬品類は季節需要の台頭、メーカーの生産抑制態度などを映じて、ひとところの軟弱地合いから次第に脱しつつある。この間、砂糖は粗糖の下限価格決定をはやした仮需要の一巡に加え、ビート糖の出回り期接近もあって弱含みとなった。

このように最近の商品市況をみると、多くの商品が徐々ながら立ち直り傾向を示しているが、そうしたなかであって、主力商品、とくに鉄鋼関係は再び軟化を示している。これは、設備投資の減少、官公需の出遅れ、個人消費、輸出の伸び悩みなど実需の不振に加え、ひとところやや明るさをみせていた市場人氣が鎮静し、中間需要も伸び悩むなど、需要面が一向に好転しないことによるほか、メーカーの生産調整の足並みがここにきてやや乱れぎみとなり、これが市況の地合いを悪化させている面も見のがせない。すなわち、鉄鋼業界においては、最近の輸出成約の伸び悩みにかんが

み、当初10~12月期の粗鋼生産枠をいくぶん圧縮する方針でいたが、各社別シェア配分をめぐって大手高炉メーカー間で意見の対立を生じ、結局輸出枠の削減が見送られたほか、逆に新設設備の稼働に基づく増枠を認めるなど、わずかながら減産率が緩和される見通しとなった。しかも、この決定についてもなお一部に不満があり、最終決定をみるまでには至っていない。このほか、綿糸、スフ糸業界においても、10月以降不況カルテルを結成し、10%の紡機封かんに踏み切ったものの、収益悪化のおりからなかには、稼働紡機の能率を上げ、増産を図るほか、第4区分紡機によるヤミ生産を行なう向きも少なくないといわれている。市中では、これまでもっぱらメーカーの強い生産抑制態度による需給の改善が期待されてきただけに、こうしたメーカーの足並みの乱れがかなり重視されており、せつかく進行しつつある需給の改善が足踏みするのではないかと警戒感が強まりつつある。これが市場人気の鎮静化に拍車をかけ、市況の地合いを弱めている面が少なくない。

今後の見通しとしても、こうした事態の背景には、メーカー間における利害の対立や、企業収益

の悪化度合いの相違などむずかしい問題が少なくなく、これを契機にメーカーの生産調整に対する商社、問屋筋の疑念が深まることも予想されるので、鉄鋼、綿糸、スフ糸などに関しては目先市況の上伸力はかなり弱くなっているとみる向きが多い。しかし、反面石油、セメント、紙などその他の多くの商品では、引き続きメーカーの生産抑制態度が堅持されていることでもあり、徐々にではあるが、これまで同様回復の方向をたどるものと思われる。

10月の本行卸売物価は前月比+0.1%と続伸した。前述のように鉄鋼、繊維は訂正安となったが非鉄、石油・石炭、木材などが上昇したためである。なお、11月上旬もこれら商品の続騰を主因に前旬比+0.1%と上昇したが、中旬には保合いとなった。

10月の消費者物価(東京)は+0.1%(季節商品を除くと+0.8%)と続伸した。魚介、果物が前月高値の反動ないし入荷増から大幅に下落したものの、公共料金(新聞代)が引き上げられたほか、家賃地代、光熱(木炭など)が上昇したためである。

10月の本行小売物価(東京)は前月比+0.6%(生

卸売物価指数の推移

(単位・%)

	引締め前 37/11 ~38/11	引締め後 38/12 ~39/11	引締め解除後 39/12 ~40/10	最近の推移							
				40年 8月	9月	10月	10月 上旬	中旬	下旬	11月 上旬	
総平均	+ 3.7	- 0.7	+ 0.9	+ 0.3	+ 0.5	+ 0.1	- 0.1	保合	+ 0.1	+ 0.2	
食料	+ 9.2	- 4.0	+ 5.2	+ 0.5	+ 0.8	保合	- 0.3	- 0.1	+ 0.1	+ 0.1	
繊維	+ 11.1	- 6.7	+ 0.7	+ 1.2	+ 1.0	- 0.1	- 0.3	+ 0.1	+ 0.2	+ 0.2	
鉄鋼	+ 4.2	- 0.5	- 1.4	+ 0.9	+ 0.9	- 0.3	- 0.2	- 0.4	- 0.1	- 0.3	
非鉄	+ 1.1	+ 19.9	+ 0.8	+ 0.5	+ 0.4	+ 1.3	保合	+ 0.3	+ 2.5	+ 2.5	
金属	+ 0.2	+ 3.6	- 0.2	- 0.1	- 0.5	- 0.1	- 0.1	- 0.1	保合	保合	
機械	- 1.4	- 0.4	- 0.4	- 0.1	保合	- 0.1	保合	保合	- 0.1	保合	
石油・石炭	+ 0.8	- 0.8	+ 1.3	- 0.4	- 0.2	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.1	
木材	+ 3.6	- 1.1	+ 2.4	+ 0.5	+ 2.3	+ 1.3	+ 0.2	- 0.8	+ 0.2	+ 0.5	
窯業	- 0.2	- 1.5	+ 0.4	- 0.1	- 0.3	+ 0.1	保合	保合	+ 0.1	- 0.1	
化学	- 0.2	+ 2.3	- 0.5	- 0.3	保合	+ 0.1	- 0.1	+ 0.1	+ 0.1	- 0.3	
紙・パルプ	+ 6.4	+ 2.7	- 4.5	- 0.8	- 0.6	- 0.3	保合	+ 0.1	- 0.2	+ 0.2	
雑品	同水準	+ 0.7	+ 0.7	保合	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	- 0.1	+ 0.1	
工業製品	+ 2.9	- 0.8	同水準	+ 0.2	+ 0.3	+ 0.1	- 0.1	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	
非工業製品	+ 6.3	- 0.4	+ 3.9	+ 0.7	+ 1.1	+ 0.2	- 0.3	- 0.4	+ 0.3	+ 0.4	

鮮食品を除くと+0.9%)と続騰した。食料品は反落したが、繊維品は需要期のため続伸、建材、雑品(かばんなど)も根強く上昇した。

10月の輸出物価は前月比-0.1%と反落した。食料品(冷凍まぐろなど)、木材、窯業(人造黒鉛など)は上昇したものの、主力の鉄鋼、繊維は国内市況の反落に加え、輸出の伸び悩み(とくに鉄鋼)から軟化した。一方、輸入物価は前月比+0.5%と5ヵ月ぶりに反騰した。非鉄がかなりの上昇を示したほか、繊維(原毛)、食料(粗糖)、機械(旋盤)、木材なども軒並み上伸した。

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

		対前年度比 上昇率		最近の推移			最近月の 前年 同月比
		38年度 平均	39年度 平均	40年 8月	9月	10月	
消費者物価 (東京)	総合 (季節商品を除く)	+7.2	+4.7	+0.4	+2.0	+0.1	+6.8
	食料	+7.9	+4.8	+0.7	+3.7	-0.8	+7.4
	家賃地代	+10.7	+9.0	+0.1	+3.4	+0.4	+7.5
	公共料金	+5.3	+3.8	保合	保合	+2.2	+8.1
	自由料金	+18.2	+11.0	-0.3	+0.5	+0.2	+9.8
	その他商品	+2.6	+2.0	+0.4	+0.8	+0.5	+3.1
本行小売物価	被服	+5.6	+2.1	-0.1	+2.4	保合	+3.4
	光熱	-0.1	-0.1	-0.1	+0.1	+0.2	+0.3
	住居	+4.5	+4.1	+0.2	+1.2	+0.6	+4.5
	雑費	+8.4	+6.5	-0.1	-0.1	+1.6	+8.7
本行輸出物価	総平均 (生鮮食品を除く)	+4.5	+2.6	-0.7	+2.6	+0.6	+4.4
	食料	+6.3	+5.3	-0.4	+2.3	-0.5	+4.8
本行輸入物価	繊維	+4.3	-0.8	-2.4	+6.2	+1.6	+5.3
	輸出入 交易条件	+2.7	+0.8	+0.3	+0.2	-0.1	-0.5
	輸出入	+4.4	-0.8	-0.3	-0.5	+0.5	-2.0
	輸出入	-1.6	+1.5	+0.6	+0.7	-0.6	+1.5

◇総合では29百万ドルの黒字

10月の外国為替収支は、総合で29百万ドルの黒字となった。資本収支は大幅払超傾向を続けているが(109百万ドルの赤字)、経常収支が季節的な事情も加わって引き続き大幅な黒字(129百万ドル)を記録したためである。まず貿易収支は、輸出の高水準、輸入の落ち着き続から、ほぼ前月並

みの黒字額を維持した。もっとも、季節性を除いてみると、貿易黒字幅は依然大きいものこのこ2~3ヵ月いくぶん縮小をみている。これは、輸入がひところよりもやや水準の上ったところで横ばいぎみとなっている一方、輸出も当月は前2ヵ月に比べて若干減少をみたためである。貿易外収支は、運輸、交互計算、手数料関係の払超を主因に、前月と同額の大幅な赤字(57百万ドル)となった。次に資本収支は、長・短期資本いずれも赤字基調を続けている。長期資本は前月に比較して赤字幅を縮小(13百万ドル、前月37百万ドル)しているが、これは、前月にガリオア・エロア債務の返済が行なわれたためであり、この点を考慮すると、とくに改善を示したものとはいえない。とくに、借入金は新規借入がきわめて低調なことから引き続きかなりの返済超過となっている。また短期資本では、ユーロ・ドルが若干の流入超を続けたほか、当月は輸出手形の資金化も進んだが、他方、輸入ユーザンスの減少、短期インパクト・ローンの返済が引き続き多額に上っており、これに為替銀行の手元積増しが行なわれたことも加わ

為替収支

(単位・百万ドル)

	40年			40年		
	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月
輸出	602 (450)	677 (512)	735 (578)	740 (584)	734 (580)	737 (597)
輸入	551 (543)	591 (549)	562 (507)	565 (484)	542 (501)	551 (519)
貿易収支	51 (△93)	85 (△37)	173 (71)	175 (100)	192 (79)	186 (78)
貿易外収支	△44 (△36)	△58 (△37)	△56 (△39)	△59 (△35)	△57 (△46)	△57 (△39)
経常収支	7 (△129)	28 (△74)	117 (32)	116 (65)	135 (33)	129 (39)
長期資本収支	5 (23)	△10 (42)	(△24) (28)	△19 (35)	△37 (25)	△13 (38)
短期資本収支	11 (99)	△44 (42)	△79 (△54)	△61 (△36)	△88 (△57)	△96 (△82)
資本収支	16 (122)	△54 (84)	△103 (△26)	△80 (△1)	△125 (△32)	△109 (△44)
誤差	△6 (△14)	△11 (△30)	△8 (△5)	△2 (△52)	△2 (11)	9 (△28)
総合収支	17 (△21)	△37 (△20)	6 (1)	34 (12)	8 (12)	29 (△33)

(注) カッコ内は前年同期(月)額、各期月平均。

輸出入指標(季節調整済み)の推移

(単位・百万ドル)

	為替			通関		信用状		輸出	輸入
	輸出	輸入	貿易 尻	輸出	輸入	輸出	輸入	認証	承認
39年									
10~12月	594	573	21	618	697	518	290	636	626
40年1~3月	655	543	112	679	659	561	279	740	580
4~6月	693	565	128	714	689	588	300	754	626
7~9月	725	585	140	739	676	598	307	755	659
40年6月	716	559	157	727	726	593	290	742	586
7月	713	562	151	750	652	604	308	745	638
8月	732	587	145	765	670	594	300	782	653
9月	731	606	125	700	705	595	314	739	686
10月	709	597	112	698	673	575	318	698	613

(注) 1. 季節調整はセンサス法による。各期月平均。

2. 輸入承認は39年4月以降計上方式が変更され統計の連続性が不完全となったため季節調整も不充分である。

って、赤字幅を拡大した(96百万ドル、前月88百万ドル)。

10月の輸出は、前年同月比為替ベースで+23%、通関ベースで+12%と、高水準のうちにもこれまでの増加率(7~9月平均、為替+27%、通関+29%)に比べていくぶん低下を示した。特に通関ベースが低くあらわれているのには、前年同月の水準が船舶の輸出集中によって異常に高かったことも響いているが、季節変動調整後でみても当月の輸出は、為替(前月比増減率、8月+2.7%、9月-0.1%のあと、10月-3.0%)、通関(同8月+2.0%、9月-8.5%のあと、10月-0.3%)ともいくぶん弱含みとなっている。商品別(為替統計)にみても、化学製品、機械、化合織などは引き続き好調であったが、鉄鋼は米国向けの減少を主因に伸び率の低下が目立ち、また食料も英米向け水産品がほぼ一段落となったことから若干減少した。

輸出信用状、認証などの先行指標をみても当面やや弱含みぎみとなっている。すなわち、信用状(季節変動調整済み)の動きを3ヵ月移動平均でならしてみると、7月±0、8月+0.1%、9月-1.6%といくぶん減少傾向にある。商品別には、化学製品、自動車、電気機械、化合織、非鉄などは引き続き好調であるが、水産品がほぼ一段落とな

り、また鉄鋼も、ソ連向け鋼管の輸出増加にささえられて全体として大きな落込みはないものの、米国向けが同国における鋼材在庫調整の動きを反映してかなり減少をみている。このほか綿製品は、アジア・アフリカなど低開発国における輸入制限強化の影響もあって、引き続き不振を示している。

輸出信用状の内容

(単位・百万ドル)

	40年 1~3月	4~6月	7~9月	40年 8月	9月	10月
食料	21 (+0)	22 (+15)	31 (+17)	28 (+16)	25 (+19)	23 (-6)
繊維	111 (+18)	115 (+16)	118 (+13)	126 (+23)	112 (+8)	121 (+5)
木製品	14 (+9)	15 (+7)	16 (+7)	15 (+0)	16 (+9)	15 (+7)
化学製品	43 (+54)	41 (+31)	44 (+49)	44 (+52)	47 (+69)	47 (+51)
金属製品	132 (+87)	138 (+47)	138 (+25)	130 (+17)	150 (+41)	135 (-34)
機械	132 (+44)	143 (+44)	148 (+28)	150 (+36)	145 (+24)	150 (+29)
雑貨	63 (-5)	72 (-6)	59 (-13)	63 (-9)	53 (-20)	61 (-17)
その他	44 (+27)	37 (+13)	35 (+13)	36 (+21)	33 (+11)	29 (-12)
北米	214 (+40)	241 (+41)	236 (+25)	237 (+24)	226 (+26)	236 (+24)
欧州	72 (+29)	65 (+12)	76 (+36)	69 (+18)	75 (+58)	71 (+21)
アジア	173 (+36)	167 (+17)	171 (+14)	176 (+23)	174 (+15)	169 (+8)
その他	101 (+22)	109 (+16)	116 (+9)	119 (+22)	114 (+5)	117 (+11)
合計	560 (+34)	583 (+25)	598 (+20)	601 (+23)	590 (+21)	592 (+16)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

一方、輸入も、前年同月比増加率でみると、為替ベースで+6%、通関ベースで-3%と、前2ヵ月に比べてかなり低下しており(8~9月平均、為替+12%、通関+9%)、特に通関ベースでの落込みが目立つ。しかしこれには前年の水準が10月以降しばらくの間食料輸入の増大などからかなり高まったことが響いており、季節変動、不規則変動を調整してみると、為替、通関とも6~7月ごろよりやや水準の上ったところではほぼ横ば

いとなっている。これは、食料が飼料、米などを中心に水準を上げていること、木材の入着が増加していることなどが主因とみられる。原綿は10月以降の減産を控えて減少をみており、また一時在庫補充の動きがみられた鉄鉱石、くず鉄も、10月には入着の増加が止まったようである。

つぎに先行指標である輸入承認の動きをみると、前年同月に比し-3.9%と落ち着きを持続している。なお、信用状の伸び率(前年同月比+7%)が、これまで(7~9月同-3%)に比べてかなり上昇しているのは、信用状付き分の比率が上昇しているためであり、信用状なし輸入の減少を考慮に入れば、この面でも横ばい基調に格別の変化はみられない。輸入承認の動きを商品別にみると、まず原材料では、木材、石炭が根強い増加を示し、また原毛も相場先高をながめた買い進みから久方ぶりに増加したが、他方、くず鉄、鉄鉱石、銑鉄などがかなり減少しており、全体ではほぼ横ばいである。このほか機械は引き続き減少傾向にあり、食料もここ一両月は増勢一服気配となっている。

輸入承認品目別内訳

(単位・百万ドル)

	40年	4~	7~	40年		
	1~			8月	9月	10月
	3月	6月	9月			
食料	119 (+10)	125 (+31)	117 (+25)	99 (+19)	126 (+14)	103 (+2)
原材料	328 (+10)	352 (+26)	346 (+8)	334 (+11)	353 (+4)	338 (+7)
原綿	39 (+5)	31 (+9)	27 (-21)	23 (+12)	33 (-17)	33 (+11)
原毛	28 (-15)	27 (+4)	26 (-3)	25 (+14)	25 (-14)	33 (+18)
鉄鉱石	28 (+32)	34 (+29)	37 (+42)	33 (+28)	39 (+72)	27 (+1)
くず鉄	11 (-26)	14 (-7)	12 (-41)	13 (-41)	13 (-39)	7 (-53)
木材	32 (+20)	38 (+50)	39 (+17)	41 (+35)	38 (+7)	41 (+57)
石油	81 (+18)	81 (+38)	82 (+27)	83 (+19)	86 (+26)	82 (+4)
化学製品	35 (-13)	41 (+23)	37 (-4)	37 (+1)	37 (-4)	35 (-17)
機械	48 (-29)	77 (+13)	49 (-10)	62 (-7)	38 (-19)	42 (-43)
鉄鋼	11 (-2)	14 (+15)	10 (-31)	11 (-19)	8 (-54)	9 (-39)
その他	41 (+15)	54 (+30)	54 (+25)	66 (+48)	44 (+7)	45 (-5)
合計	583 (+4)	662 (+25)	613 (+9)	608 (+11)	606 (+2)	571 (-4)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。
39年4月以降は計上方式が変更されたのでそれ以前の計数とは連続しない。

国内経済要録

◇政府の下期中小企業金融対策

政府は10月19日、年末を中心とした40年度下期中小企業金融対策を、次のとおり決定した。

国民金融公庫、中小企業金融公庫および商工組合中央金庫の融資枠を820億円拡大する(前年同様に決定された融資枠拡大は800億円)。本措置の所要原資は、3機

関自己資金300億円、資金運用部資融520億円(うち長期資金240億円、短期資金280億円、短期資金は全額年越し返済)。なお、例年実施されてきた中小企業向け市中保有金融債の資金運用部による買入れ(前年度500億円)は、本年は見送られることとなった。